

キルトワールド

キルトジャパン
Quilts Japan

特別編集

日本ヴォーグ社

Quilts World

今、世界で注目されるキルトの数々



作品を見ればその人が分かるという。最優秀賞を獲得したホリス・シャテラインは、まさにその言葉通りの作家だ。

凛とした意思ある佇まいと魅力溢れる愛情深い大きな瞳、そして輝く自信と強さ。彼女を一目見た瞬間、作品から受ける印象と同じものを感じる。ことだろう。

抽象的で曖昧な表現が多いキルトの中で、色鮮やかな作品の持つ強いメッセージは、見る者の心にもつすぐに届く。その表現力は、師であるキャリル・ブライヤー・ファラートから学んだものだ。キャリル自身も説明が不要なほど著名な、現代を代表するキルトの一人。ユニークなアプローチから始まった二人の関係が、アーティスト同士の固い絆となるまでを、AQSのあるパデュエカのキャリルのスタジオで聞いた。

キャリルとの出会い

ホリスがこの最優秀賞を得るのは、2004年に次いで2度目だ。IQFのコンテストだけでも各部門の1位をはじめとして、1993年から9点もの作品が受賞を果たしている。

そう聞くと、最新のミシンを颯爽と使いこなす、キルトに恵まれた環境にある作者を思い浮かべる人も多いだろう。多くの意に反し、ホリスがキルトを始めたのは、アフリカにあるマリという国に住んでいた時だ。パッチワークはおろか、手芸店さえほとんどない。

その頃のホリスは写真家、画家、デザイナー、イラストレーターなど、数々の職を重ねていた。というのも、写真そのものが

[International Quilt Festival - World of Beauty / 最優秀賞]

Best of Show Award

Hollis Chatelain

ホリス・シャテライン

苦しみや混乱だけではない アフリカを伝えたい



IQF World of Beautyの授賞式にて。スポンサーであるMartingale社のキース・ブランツ氏(左)より賞金10000ドルが渡された。



Profile アメリカ・ノースカロライナ州在住。スイスと西アフリカ4カ国で14年を過ごす。写真家、画家、デザイナー、イラストレーター、テキスタイルアーティストなどの職を経て、キルトに出会う。キャリル・ブライヤー・ファラートに技術を学び、AQS、IQAをはじめとする数々の国際コンテストで受賞歴多数。アメリカ国内、アフリカ、ヨーロッパ各地で個展や作品展示、レクチャーなどを行っている。 <http://www.hollisart.com>



アフリカでは歓迎されていなかったからだ。外国人が入ってきて、何もかも撮ってしまおうという雰囲気があったのだそう。そんな中、アフリカの布の色使いやデザイン、生活の中に溶け込んだ美の感覚に衝撃を受け、仕立て屋や工場から端切れやミスプリントの布をもらい集めるようになる。だんだんと溜まり、キルトを作ることを思いつく。そして本を見ながら見よう見まねで作ってみる。

1989年アメリカの雑誌の表紙になっていたキヤリルの作品をたまたま目にした。「自分が作りたいのは、これだ!」とひらめいたそう。自分でデザインして作ってみたいものの、思い通りにはいかず、思い切ったキヤリルに手紙を書く。首を長くして返事を待つが、一向に届かない。

100色を超える糸を使い、ミシンのキルティングで表現に深みを出す。写真も、絵も届かない領域だ。

Best of Show

Hope for Our World 208.3 × 208.3cm





Precious Water 195.6×215.9cm
IQF 2004 Best of Show



キャリル(右)の家のリビングにて。

キャリル・ブライヤー・ファラート

Profile 1980年代よりキルトを始め、数多くの国際コンテストで受賞を取る。15以上の全国レベルのコンテストでベスト・オブ・ショーに輝いたほか、AQSのコンテストではベスト・オブ・ショーを3度も受賞している。その作品はヨーロッパ、オーストラリア、日本など多数の国で展示され、世界中でワークショップや講演を行っている。
<http://www.bryerpatch.com/>



キャリルの家に飾られた
ホルスの作品「Tabaski Ram」。

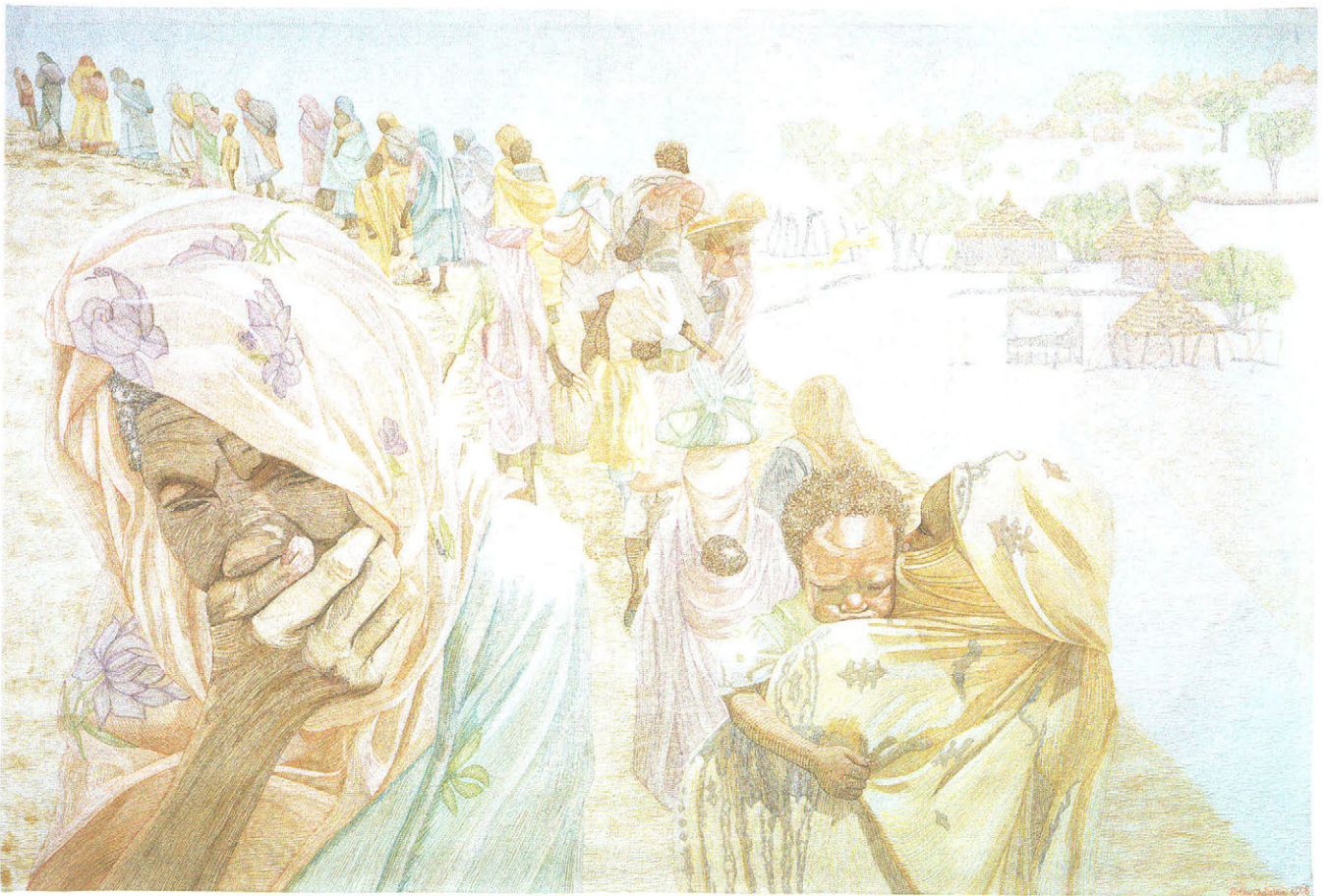
その手紙について、キャリル曰く、「国籍や性別さえ、その手紙には一切書いていない。通信教育で学びたい、アドバイスを欲しいの一点張り、返事のしようもなかった」。後にホルスは、キャリルの作品から受けた衝撃があまりにも大きく、手紙ではそれを伝えるのに夢中だったと大きく笑う。これが二人の出会いだ。

半年後二人はようやく対面することが叶う。「ホルスにデザイン的なキャリアがあることはすぐに分かりました。キルト経験は少ないけど、アーティストとしてのバックグラウンドがあると感じた」とキャリルはその時のことを振り返る。「ドローイングを教えていたことや、写真家として活躍していたキャリアを聞いて、やっぱり、と。キルトに関してはどうしたらいいか、情報も手立てもない様子だったので、私の中級者向けのセミナーに誘ったの」

そのセミナーでもホルスはユニークだった。270センチを越す大きなデザイン画と、飛行機に乗る最大のトランクに、アメリカの布をいっぱい詰めてやってきたのだ。「デザイン的には彼女の世界がしっくりとありました。私が教えたのは、ミシンの使い方や、簡単に表現するにはどうしたらいいかという技術的なこと。アイデアとテクニックが出合って、どんどん溶け合っていくのがわかった」と言う。一風変わった、でも大きく秘めたものがある生徒だったことがよくわかる。

キルト作家になる決意

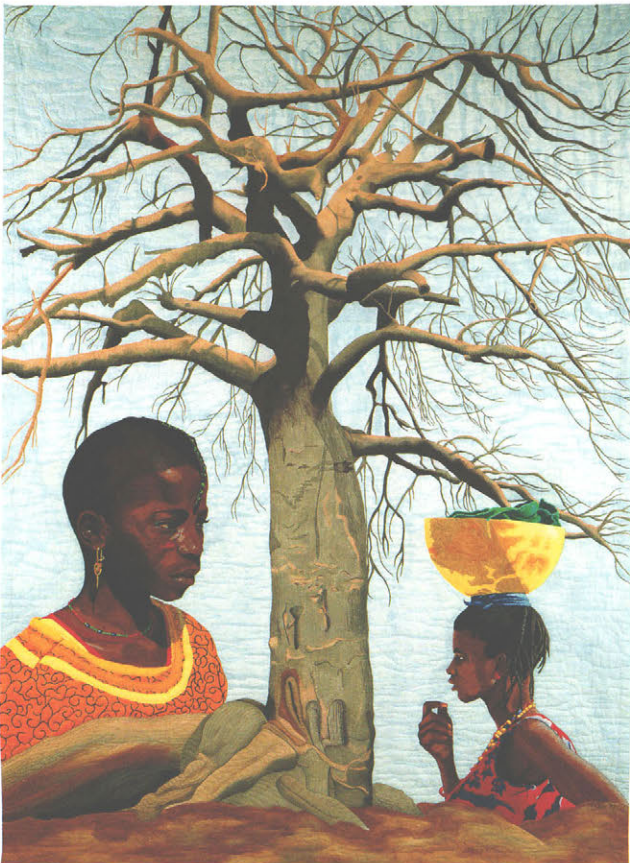
アメリカの大学を出た後、アフリカに14



Exodus 132.1×193cm

Hollis Chatelain Best of Show

出世作『Sahel』は1997年の作品。



アフリカにてスケッチをするホルリス。

年住んでいたホルリスだが、キルト作家として生きることを決意し、家族とともにアメリカに居を移す。その時に背中を押し、大きな後ろ盾となってくれたのもキャリアルだ。作品紹介文やコンテストの応募用紙の記入の仕方、仕事の進め方や編集者や出版社への紹介までも、キャリアルが指導している。

まずは代表作となる作品を作って、それを大きくプロモーションするのが効果的と言われ、できたのが『Sahel』。ホルリスの出世作と言える作品だ。1997年にIQFのコンテストで賞を獲得している。この当時は一枚布にペイントしたホールクロスのキルトは多くなく、アップリケだと思われたそうだ。「縫い目がないじゃない！」と驚かれたと言う。

その後ホルリスの生命力溢れるメッセージ

性の強いキルトは、見る人を魅了していく。IQAが選ぶ「20世紀の100点」にも、一番新しい作品として選ばれた。ただしキルトの世界をあまり知らなかったホリスは、「皆がおめでとくと一言つけてくれるので、そうか、名着なことなのか」と気づいたそよだ。

キルトで伝えたいこと

アメリカへ移ったものの、10年以上も住んでいたアフリカの暮らしへ思いが募っていく。アフリカをテーマに作り始めたのは、描くことで、自分の愛していたそこで生活に一時でも戻らせてくれるという思いからだ。

「メディアによって伝えられる苦しみや混乱のアフリカだけではなく、そこでの人々の喜びや調和、自尊心をもっと知って欲しいと思っています。私がかから賞賛し、尊敬する人々への感謝として、アフリカのさまざまな面を伝えたいのです」

2000年以降アフリカの地以外にも、興味に向くようになった。その作品は大使館や銀行など一般の施設で飾られ、キルトの枠を超えて多くの人の心をつかんでいる。環境破壊や紛争問題が社会的に叫ばれる中、キルト界も彼女のような表現者を待っていたのかもしれない。

ホリスの作品は、どれも色濃く鮮やかだ。その独特の色使いと、広い見地から描き出される深いテーマは、すべて彼女の夢から生まれている。夢はとてはつきりとしていて、オールカラーだ。自分の感情や目指すものが表れているのだと「言う」。自分の気持ちたちが安定した時には、イメージや色が流

Nature (自然)

Goddess of the Dance 55.9×94cm



Abstract (抽象画)

Hammered
Shadows #1
81.3×40.6cm



Abstract (抽象画)

Cast Garden #1
106.7×48.3cm



The Gift

121.9×132.1cm
IQF 2007 1位

れる夢を見ます。逆に混沌としている状態では、人間や出来事の夢を見るのです」。一度インスピレーションを感じたら、時間をかけて調べ、下描きをし、構図を決める。抽象画や自然をテーマにしたキルトも作るが、人物を描く作品が今の自分に最も意味があると感じている。

今回の受賞作『Hope For our World』は、2002年2月に見た夢からできた作品だ。その夢は紫色で、トウトウ司教が草原に立っているというもの。世界中から来た子どもたちが彼に近づき、世界平和と自分たちの未来を語っているように見える。司教が象徴しているのは希望だ。

アーティストとして

独自の作風が確立し、支持を得るようになった今も、その作品の根底にあるのはキヤリルから学んだ技術と感覚だ。特になめらかなグラデーションはホリスの表現の幅を広げる大切なテクニクだ。また一つの作品で時には200種類以上の糸を使い分け、深みを表現する方法も、キヤリルから指導を受けたテクニクである。写真ではできないことさえ、キルトというツールを使えばより豊かに伝えられる。これらはホリスの骨となり、表現力を支えている。

先日、キヤリルからホリスへ手紙の束が渡された。これはアフリカに住んでいた頃二人の間で続いていた文通の書簡だ。「ホリスはとても筆まめで、今日のアフリカの様子などを綿々と綴った手紙をたくさん送ってきてくれた。いざれ彼女が本を書いたり、何かにまとめるような時には、その手紙を

Hollis Chatelain Best of Show

Nature (自然)
Baobab Forest 61×266.7cm IQF 2004 1位



返そうかなと思っていたの。そろそろその時期が来たようだと思って」

奇しくもホリスが最優秀賞を得たこの同じコンテストで、キヤリルはコンテンポラリー・アーティストリー賞を受賞している。その授賞式の壇上でキヤリルはこんなことを語った。「私は今、とてもわくわくした気持ちでここに座っています。私の生徒の中のスターで、私が後見人となり、友人であり、キルトをする人間の中で最も敬愛する人物ホリスと同じ場にいるからです」

尊敬しあうアーティスト同士となった二人は、お互いに影響し合い、これからもキルト界をリードしていくことだろう。

Blue Men 147.3×193cm IQF 2001 Contemporary Artistry
AQS 2003 Machine Workmanship Award

